

死人の鏡 DEAD MAN'S MIRROR

1993年作品

製作:ブライアン・イーストマン 監督:ブライアン・ファーマム 脚色:アンソニー・ホロウィッツ

日本語版プロデューサー:里口 千 日本語版演出:山田 悦司 日本語版翻訳:宇津木 道子

出演:

エルキュール・ポワロ … デビッド・スーシェ/熊倉 一雄

ヘイスティングス大尉 … ヒュー・フレイザー/富山 敬、安原 義人

ジャップ主任警部 … フィリップ・ジャクソン/坂口 芳貞

※ ※ ※

ジャベイス・シェブニックス … イアン・カスパートソン/富田 耕生

ルース・シェブニックス … エマ・フィールディング/戸田 恵子

ミス・リンガード … フィオナ・ウォーカー/北村 昌子

ヴァンダ・シェブニックス … ゼナ・ウォーカー/中村 紀子

ジョン・レイク … リチャード・リンターン/大塚 芳忠

ヒューゴ・トレント … ジェレミー・ノーサム/堀内 賢雄

スーザン・カードウェル … タシュカ・バーゲン/潘 恵子



©ITV Studios Limited 1993

ポワロは、オークションで手に入れたかったアルデコの鏡を競り落としたジャベイス・シェブニックスに、詐欺の調査を依頼された。ジャベイスの屋敷でポワロは、彼の妻ヴァンダと会う。彼女は、魂の案内人と仰ぐ聖霊サフラから死を予告されていた。その夜、銃声が響き、書斎のドアを開けると、中ではジャベイスが死んでいた。ジャップは密室の自殺だと断定するが、疑問を感じ捜査を始めたポワロは2通の遺言書を見つかる。

◆ゴングと鏡

同名原作小説は、それ以前に発表されたクリスティ自身の短編小説『二度目のゴング』を発展させたもの。暗示的な題名ですが、本ドラマでもそれについては事件の発生時から充分、判り易く触れているので、殊更のネタバレにはならないでしょう。

怪奇テイストとモダンアートの意匠に彩られ、ムード的には本シリーズらしい一編なのでしょうが、密室的な現場に残された様々な痕跡の意味および殺人動機という謎と、それらのムードとの有機的な絡みがいまひとつである為、謎は謎、ムードはムードと別立てになってしまうくらいがあるのが少し残念です。ただ、謎めいた鏡、日くあげなドラ、簡単そうで複雑な密室、エキセントリックな人間関係と、謎解きの要素は魅力的です。

◆火を噴くアクション

出火したノースゲート開発の社屋から、辛うじてジョン・レイクを救い出すポワロたち。間一髪、建物は爆発し激しい炎を噴き出します。人間関係の織り成すドラマ展開が主体の本シリーズですが、時折、少し予算のかかったアクション・シーンが挟まれるのも特徴のひとつ。本話の様な激しい爆破シーンも、シリーズ終焉までにまだ、一度ならず描かれます。

ちなみに、救い出された建築家レイク役のリチャード・リンターンは、シリーズ後盤『マギンティ夫人は死んだ』にも出演、殺害された掃除婦マギンティ夫人の雇い主の一人である女性の、夫役を演じています。

◆プロフィール:ジェームズ・ハロルド・ジャップ[1]

職位はスコットランド・ヤードの主任警部。職務に忠実なるも仕事中心の生活を送る、叩き上げの苦勞人。その人となりはポワロとは逆で、世事情事に通じ、母国の田舎料理を好む大食漢と、どちらかと云えばヘイスティングスに近いでしょう。部下に厳しく犯罪者にもシニカルに接しますが、カミさんには頭の上からぬ恐妻家。妻エミリーが長期で出掛けてしまうと、家は散らかり服装は乱れ食生活も心許なくなるあたり、仕事人間の典型とも言えるでしょう。

帽子を胸に当てる癖があり、特に話を聞く時に顕著で、解決編でポワロの推理を賜る際はかなりの確率でこのポーズが見られます。

本話では、ジャベイス・シェブニックス死亡の現場を自らあらため、自殺に決まりと断ずるも、ポワロが提示する疑問や証拠を合理的に受け止め、さほど感情的になることもなくその考えを改めるなど、シリーズ初期と比べ、ポワロとの関わり方に転身を見せています。